

17 第一大臼歯萌出遅延症例について

砥 上 照 美

とがみ 歯科・福岡市

第1 大臼歯は永久歯咬合の基礎となる歯牙でありその萌出過程や順序には大いに関心が払われねばならない。

今回当院管理下患者で第一大臼歯の萌出に異常がみられる症例について検討を加えてみた。歯の萌出遅延についてはその発育環境に原因がある場合と歯胚そのものに原因があるものとに分類されると述べられている。

その発育環境に原因があるものとしては、歯牙腫や萌出性腐骨の存在あるいは第一大臼歯の第2 乳臼歯下への異所萌出などがあげられる。これらについては、その萌出阻害因子を早期に発見し適切な時期にとり除いてやることが不可欠となる。

次に歯胚そのものに萌出遅延の原因があると思われる症例については、2 年以上、対照歯と比較して萌出がおくれている症例。

または、それ以前であっても萌出遅延の為に正常な咬合形成に何らかの臨床的問題点ができてきている症例をとりあげて報告したいと思う。

第1 大臼歯の萌出遅延はどの部位にも現われるが一方の側に発育遅延がみられても他側は影響をうけず独立して正常な発育をとげる。これらは歯胚の位置や方向が正常で発育環境に問題がなければ放置しておいても最終的には正常な咬合を形成すると思われる。

しかしとりわけ下顎第一大臼歯に萌出遅延がみられた場合には上顎第一大臼歯の挺出が多くみられ臨床的問題が生じてくるので何らかの処置が必要となるであろう。

なお、これらの症例については今後とも長期的な観察を続けていきたいと思う。

18 幼少年期における歯・顎・口腔領域外傷についての臨床的考察

○山根靖司 二木寿子 山角知美 藤本昭代

宇治寿康

宇治歯科医院（熊本市）

近年の交通事情の輻輳化や、スポーツ熱の高揚により、反面、交通外傷やスポーツ外傷の頻度の漸増と、その複雑化の傾向が指摘されている。特に幼少年期の外傷は、外傷発生時から治癒経過を通じ、患者らが成長発育途上にある事を加味し、成人の場合とはその対処の方法が異なるのではないかと思われる。すなわち、成長発育を阻害しない最大限の努力を要するのではないだろうか。私達は、1985年から1990年前期までの約6年間にわたり経験した、幼少年期の歯および、その周辺の外傷患者の統計的、臨床的経過観察について報告する。主な観察項目は年齢、性別、受傷部位、現症、処置内容、術後経過の良否である。さらに、外傷の子防策としてのmouth protector の応用について考察したのでここに報告する。